

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における

「病」の問題

西村晶絵

はじめに

生来病弱であったことに加え、当時の医学において「病」とされた同性愛を生きた作家アンドレ・ジッド (1869-1951) は、多くの著作において様々な角度から「病」(la maladie, le mal) の問題を取り上げてきた¹。例えば 1902 年の『背徳者』(*L'Immoraliste*) では、主人公ミシェルが結核にかかったことをきっかけに、既存の秩序や従来への慣習を退け、新たな価値観のもとに生きる様子が描かれる。また、1909 年の『狭き門』(*La Porte étroite*) には、極端な禁欲主義によって心身を病み死んでいくアリサの姿を通じ、信仰がもたらす悲劇が描出される。フィクション作品のみならず、ジッドは日記や評論などにおいてもしばしば「病」についての見解を記しており、彼の思索や作品の理解において、「病」は重要なテーマの一つであるといえる。

すでにいくつかの研究においては、こうしたジッドにおける「病」の問題への着目がなされてきた²。その一方で、1914 年に出版され、「ソチ」(sotie³) に分類される『法王庁の抜け穴』(*Les Caves du Vatican*) に表される「病」は、これまでほとんど目を向けられてこなかったように思われる。本作品に関する重要な研究書であるアラン・グーレの『アンドレ・ジッドの「法王庁の抜け穴」』においても、同作品中の「病」について十分な検討がなされているとは言い難い⁴。この物語の「病」を子細に論じている唯一ともいえる研究は、ラッセル・B・ウエストの博士論文『ジッドにおける病の表象』である⁵。この博士論文は、ジッドの著作を網羅的に取り上げ、そこに描かれる「病」の表象を分析したものであり、そこでは『法王庁の抜け穴』の各登場人物たちの「病」が物語の中で示す意味についての緻密な検討がなされている。

しかしながらこのウエストの論文は、ジッドのテキストを丁寧に分析してはいるものの、作品内部で分析を完結しており、同作品が描かれた時期や舞台となっている時代の宗教や「病」を巡る社会的コンテクストについて一切言及していない。ところが、1893 年にサン＝マロで起こった法王レオ 13 世の幽閉を騙る詐欺事件にモチーフを得るなど、『法王庁の抜け穴』には史

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における 「病」の問題

実的な要素が盛り込まれていることも事実である。このことに鑑みるならば、この作品に描出される「病」は、社会的背景を踏まえて検討してはじめて、作品内外のコンテクストにおける総合的な意味合いを明らかにし得るものだろう。またウエストは、この物語の各人物たちの「病」を通じ、そこから浮き彫りとなる彼らに向けられたアイロニカルな視点を浮かび上がらせようとしているが、なぜ彼らがそのような揶揄される存在として描かれているのかという点までは明らかにしていない。とはいえ、『法王庁の抜け穴』が「ソチ」である以上、作品内に見出される皮肉な視線は登場人物らのみに向けられているはずはなく、そこから作家の真の意図を読み取ることが、この作品の十全な理解にとって欠かせないと考えられる。

こうした観点から、本研究ではまず、この物語に描かれる「病」とそれらをめぐる人々の言動を検討した上で、それらを作品の舞台となっている 1890 年代から本作品が出版された 1914 年までのフランス社会やカトリック教会における「病」やその治癒をめぐる言説と照らし合わせることで、作品中で「病」とカトリックがいかなる関係にあるものとして描かれているかを明らかにする。次いで、『法王庁の抜け穴』の登場人物ラフカディオと、ジッドがこの物語を執筆するにあたって意識をしていたとされるドストエフスキー（1821-1881）ならびにその小説に描かれる人物たちとの比較を通じ⁶、ジッドが『法王庁の抜け穴』を通じて描き出そうとした「病」の性質を明確にするとともに、そこから浮かび上がる当時のジッドの問題意識の所在を探ることを試みたい。

I. 作品の構成と各登場人物の関係性

作品分析に入る前に、『法王庁の抜け穴』の内容や構成の概要を紹介する。この物語は、法王が幽閉されていると偽り寄付金詐欺を働く「ムカデ組」(Le mille-pattes) に翻弄され、カトリック信仰に揺れる人々が示す様々な反応を描いた物語である。本作品のフランス語タイトル *Les Caves du Vatican* の« cave »という語は、「地下牢」という意味に加え、「間抜けな人」という意味を持つ。この物語は、地下牢に幽閉された法王をめぐる話であると同時に、法王庁＝カトリックに翻弄される愚かな人々についての話である。5部構成になっており、各部にはそれぞれ「第1部 アンティム・アルマン＝デュボワ」、「第2部 ジュリウス・ド・バラリウール」、「第3部 アメデ・フルーリッソワール」、「第4部 ムカデ組」、「第5部 ラフカディオ」という見出しが付されている。これらの名前や名称は、その部に中心となって描かれる人物や組織の名

前であるが、作品にはこのほかにも多くの人物が登場する。そして彼らのほとんどは、以下の家系図に示されるペトラ家とバラリウール家という二つの家族にまつわる人々である⁷。各部に名前が冠してある人物については下線を付き、その下に括弧書きで取り上げられている部を明記する。

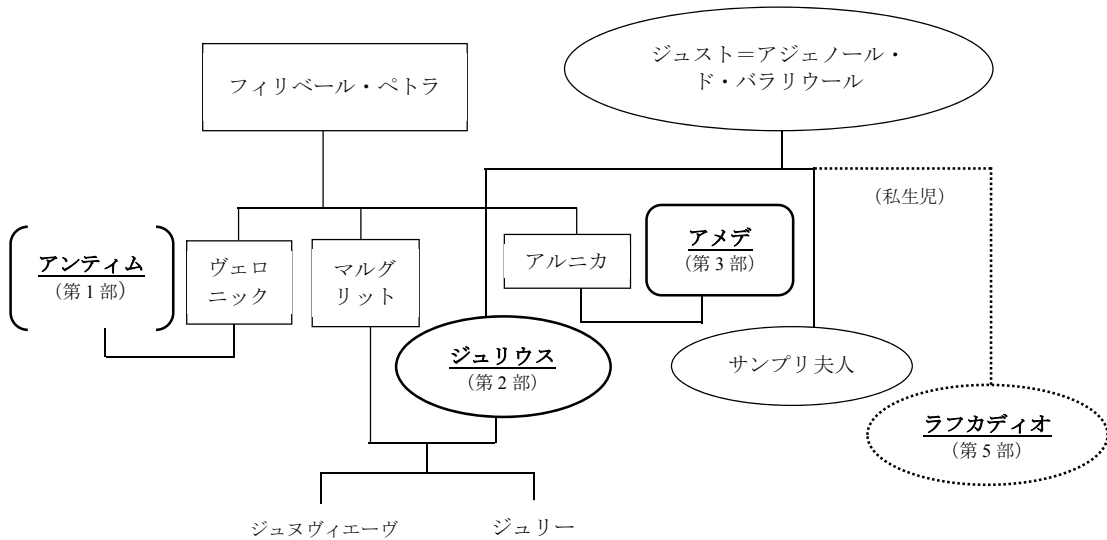


図1：ペトラ家・バラリウール家家系図（筆者作成）

この図にあるように、ペトラ家とバラリウール家という二家族は、ペトラ家の次女マルグリットと、バラリウール家の長男ジュリウスの結婚によって結びついている。本家系図において実線で結ばれている人々は、社会的に「家族」と見なされるコミュニティに属しており、家族や家庭が象徴する社会の様々な枠組みや、しがらみ、制限といったものの中で生きている。それに対して、点線で結ばれたラフカディオは、家族からはみ出た私生児であり、いかなる枠組みや束縛からも自由な存在として描かれる。つまり、『法王庁の抜け穴』においては、社会の圧倒的多数である「家族」という枠内に生きる人々が、ラフカディオというアウトサイダーを通じて相対化されるのである。以下に、各部の見出しに名前が挙がっている人物について簡単に紹介する。

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

- ・アンティム・アルマン＝デュボワ…フリーメイソンの科学者で無神論者であったが、奇跡的な体験の後に持病の坐骨神経痛が治ったことから、カトリックの信仰に目覚める。
- ・ジュリウス・ド・バラリウール…カトリック教徒で小説家。アカデミー入りを望んでいる。
- ・アメデ・フルーリッソワール…詐欺集団「ムカデ組」によって流された法王幽閉の噂を耳にし、真実を突き止め、法王を救出すべくローマへ赴く。しかし、ナポリに移動中、同じ車室に乗り合わせた見知らぬ青年ラフカディオによって殺される。
- ・ラフカディオ・ルーキー…ジュスト＝アジェノール・ド・バラリウール伯爵の隠し子で、私生児。常識や慣習、制度、家族、宗教といった枠組みに捕らわれない存在。伯爵の死後、その遺産で旅に出るが、その途中思い付きでアメデを殺害する。

II. 『法王庁の抜け穴』における「病」と信仰の問題

それでは、この作品に描かれる「病」と、それに対する人々の信仰心の関わりについて分析していくことにしよう。とりわけ着目したいのは、坐骨神経痛を患うアンティムと、皮膚の炎症を気に病むアメデである。「病」を前にした彼らの反応を通じ、それが彼らの信仰の問題といかなる連関を持つものであるのかを明らかにすることを目指す。

① アンティム・アルマン・デュボワの場合

『法王庁の抜け穴』は「1890年、法王レオ13世の在位中⁸」を舞台とし、フリーメイソンのアンティム・アルマン・デュボワが、リウマチ性疾患の専門医の名声にひかれ、ローマに出かけるところから始まる。アンティムは、小動物を用いて生体実験を行う科学者で、自分の観察する動物たちのあらゆる活動を「トロピスム」（動植物がある刺激に対して一定方向に屈曲する性質）に還元しようと目論んでいる。こうした彼の研究の最終目的は、「神を激しく攻撃すること」にある。アンティムがこのような思想を持つに至った理由は、次のように説明されている。

ここで、重要な点しか詳しく記すまいという気持ちに反して、私はアンティム・アルマン＝デュボワの瘤に触れないではられない。[...] 実際、この瘤がいかなる役割も果たさなかった、アンティムが自分の自由思想と呼ぶものの決定において、いかなる影響も及ぼさなかったなどと、誰が断言できるだろう。彼は坐骨神経痛の方はまだ容易に無視できた。

しかし、この下劣な仕打ちについては神を許せないのだった⁹。

この引用から理解されるのは、神を否定しようとするアンティムの思想は、身体的なコンプレックスに因るものであり、彼の精神的均衡を保つための手段だということである。しかし、アンティムが頑なに信仰を拒む一方で、敬虔なカトリック信者の妻ヴェロニックは、彼のために毎日祈りを捧げていたのだった。そのことを知ったアンティムは、当人の意思に反してその人のために祈ったり、本人の知らない間に恩恵を求めたりする権利などないと逆上し、家のマリア像を杖で破壊してしまう。ところがその夜、彼は夢の中で、先ほど自分が傷つけた聖母らしき人の姿を目にし、突然わき腹に激痛を感じると、暗闇の中で目を覚ます。しばらくして意識を取り戻したアンティムは、ベッドからそっと抜け出すと、松葉杖も持たず部屋から出ていくのだった。そのただならぬ気配に目を覚ましたヴェロニックが彼を追いかけると、何年も曲げることのできなかった膝をつき、破壊されたマリア像の前で一心不乱に祈る夫の姿を目にしたのである。

この不思議を前にして狼狽したヴェロニックは、退くことも入ることもできず、自分も入口のところで夫と向かい合わせでひざまずこうと思った。そのとき夫は楽々と立ち上がると、ああ、なんたる奇跡だろう！しっかりした足取りで彼女の方に歩み寄り、両腕に彼女を抱きしめた。

「これからは」とアンティムは妻を胸にきつく抱きしめ、彼女の方に顔をかしげて言った、「これからは私と一緒に祈るのだよ。」¹⁰

この奇跡的な坐骨神経痛の治癒の後¹¹、すぐさまアンティムはそれまでの科学者やフリーメイソンとしての地位や思想を捨て、聖母マリアに仕えることだけを望むようになる。しかしながらこの思想的転向によって、フリーメイソンの金銭的支援を得られなくなった彼は破産に追い込まれてしまう。アンティムからそのことを相談された神父は、教会が彼の失った財産を補填すると約束したのだったが、その支援はいっこうに果たされる気配がなく、アンティムとヴェロニックはひどく貧しい暮らしを余儀なくされるのだった。ところが、彼らのもとに尋ねてきたジュリウスがその暮らしぶりについて指摘すると、アンティムは次のように答えるのだった。

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

確かに私は少しばかり貧乏だが、これ以上に何が要するというのだろうか？私は過ちを犯していた、お金のあった頃はね。罪人だった、病んでいた。今はもう、このように治ったのだ¹²。

このようにアンティムは、坐骨神経痛という身体的な「病」を持っていたかつての自分を、精神的にも「病」の状態にあったと捉え、お金はなくとも、今は心身共に「病」を克服した状態にあると主張する。今や彼にとっては、信仰を持たない状態こそが、罪＝病＝悪（le mal）であると認識されるようになったのである。

② アメデ・フルーリッソワールの場合

アンティム同様、心身の状態と信仰の問題が密接に結びついた人物として描かれているのは、アメデ・フルーリッソワールである。この人物の身体的特徴は、次のように記されている。「背は高くないのに身体が歪んでおり、痩せているというよりも骨と皮だけで、ブロンドというより色褪せたような髪、ふてぶてしい鼻に、おどおどした目つきだった¹³」。そして、フルーリッソワール（Fleurissoir）という名前（fleuri＝「吹き出物の出た」の意）に違わず、思春期の頃、彼の顔はニキビだらけであったと記されており、また以下に見るように、彼は皮膚疾患によって悩まされる人物といえる。

「虚弱な体質」（complexion délicate）でありながらも、アメデは妻アルニカから法王幽閉の話聞かされた途端、ローマまで真実を突き止めに一人で出かけていくことを決意する。しかし、最初に泊まったマルセイユのホテルで南京虫に悩まされ、次いでトゥーロンでは蚤の被害に遭い、ジェノヴァでは蚊に苦しめられる。これらの虫刺されによって、彼の皮膚は炎症を起こし、「もともと鷲鼻だった彼の鼻は酔っ払いのそれに似てきた。ひかがみのできものは腫物のようになり、あごの吹き出物は火山のようになっていた¹⁴」。そしてローマに着くころになると、アメデはすっかり疲労困憊しており、駅にいたフランス語を話す荷物持ちに案内されるがまま、市内に部屋を借りることになる。しかし、ようやくベッドに倒れ込んで1時間後に目を覚ますと、同じ建物内に住む娼婦カローラが、裸のまま彼に身を寄せて眠っているのに気がつくのだった。

アメデは、彼と同じくアルニカに恋心を抱いていた親友ガストン・ブラファファスと交わした約束（ブラファファスを悲しませるくらいなら、アルニカに対して結婚による権利を行使し

ないという約束) から、妻アルニカとは性交渉を伴わない生活を送っていた。貞操を守り続けてきたにもかかわらず、このような仕方では純潔を失ってしまった彼は、次のように絶望する。

彼はアルニカのこと、ブラファファスのことを悲しく思い浮かべていた！ああ！もし彼らがこのざまを見たら！今となつては、どうしておめおめと彼らのそばに戻っていけるだろう…。それから彼は今や危機に瀕した自分の厳粛な使命に思いを馳せた。彼は低い声でうめいていた。

「万事休すだ！私はもうふさわしくない… ああ！万事休すだ！もうおしまいだ！ […] 救えるものなら救ってみろ！教会が崩れるぞ…」¹⁵

アメデは、カローラとの間に起こした過ちによって、彼自身の運命のみならず、ローマ教会の運命も決定付けられてしまったと考え狼狽するのである。法王救出という自らの担っていた崇高な使命に対して、このような仕方では純潔を失ってしまった自らを悔い、アメデは悲観的になるのだった。そしてこの失態を気に病む彼は、後日、虫に刺された部分が化膿しただけで次のように思い絶望する。

あれだったとしても、彼には当たり前だと思えた。なぜなら、要するに彼は罪を犯したのだから、それがあれであって当然なのだ。それはあれに違いなかった。背筋に戦慄が走った。 […] ああ！剃刀で切られたことにせよ、薬屋に唾を付けられたことにせよ、きっかけとなった原因などどうでもよいことだ。深い原因、彼がこの罰に値するようになった原因を、彼女 [=カローラ] にしかるべく言うことなどできただろうか。 […] 彼はもう顔も体も膿疱に覆われた自分の姿を思い浮かべた […]。

「 […] ああ！私には当然の報いだ！自業自得だ！」¹⁶

単なる皮膚の炎症にもかかわらず、アメデは深刻な「病」（ここではおそらく性病であろう）に罹ったものと思ひ込み、その「病」を自身が犯した宗教的な「罪」に対して下された「罰」として捉えていることが理解される。彼にとって自身の心身の状態は、宗教的な観点から捉えられているのである。

以上のように、奇跡的な「病」の治癒によって信仰を取り戻すアンティムや、自らの心身の状態を宗教と結びつけて捉えるアメデについての描写には、19世紀末から20世紀初頭における「病」と宗教をめぐるコンテキスト、とりわけ、ルルドの傷病者巡礼をめぐる社会状況の一端が映し出されているように思われる。『法王庁の抜け穴』とルルドの傷病者巡礼の連関は、この作品についてのこれまでの研究において指摘されてこなかった。しかしながら、こうした観点を通じて、なぜアンティムやアメデが上述のような人物として描かれているのかという点について検討することが可能になるだろう。次節では、この巡礼地についての歴史を概観したうえで、それと『法王庁の抜け穴』に描かれる登場人物たちの言動を照らし合わせ、そこから浮かび上がる作家の関心の所在を検討してみることにしよう。

III. フランスにおけるルルドを中心とした巡礼の盛り上がりと『法王庁の抜け穴』

ルルドは、フランス南西部ピレネー山脈北麓に位置し、1862年に教皇によって聖地に認定されたカトリックの巡礼地である。この地においては、1858年2月11日から7月16日までの間、18回に渡って聖母マリアが少女ベルナデットの前に姿を現したとされる。ある日ベルナデットが、「泉の水を飲み、洗いなさい」というマリアの教えに従ってマサビエル洞窟の中に降りていき、そこを掘ると、水が湧き出したのだった。その後、その泉で沐浴した病人が奇跡的な治癒を遂げたことから、ルルドは各地から多くの傷病者が回復を求めて集まる巡礼地となり、19世紀後半から大きな盛り上がりを見せるようになる。修道会の復興や鉄道網の整備と相まって、この時期には全国規模での巡礼運動が盛んになったが、その中でもとりわけルルドは、カトリック教会にとって重要な聖地として位置づけられていた。共和国の理念に基づく共同体の形成が進んだ19世紀においては、宗教がそれまで担っていた多くの役割を国家が引き受けるようになり、それに伴って社会でのカトリックの存在感が薄れていた。さらに1890年前後には、社会に大きな広がりを見せたフリーメイソンがカトリックとの敵対関係を強めてもいた。こうした中で、カトリックはルルドのような巡礼運動の盛り上がりを通じて、自らのグループ・アイデンティティを回復することに成功したのである¹⁷。

時に熱狂や非難を巻き起こしながら人々の注目を集めていたルルドには、当時の作家たちの目も注がれていた。例えばゾラは1894年に『ルルド』(*Lourdes*)を¹⁸、1906年にはユイスマンが『ルルドの群衆』(*Les Foules de Lourdes*)を出版している¹⁹。そしてジッドも、こうした社

会状況を踏まえて『法王庁の抜け穴』を執筆していることは確かであろう。というのも、第一に、この作品においても「ルルド」という単語がさりげなく登場しているからである。例えば、アンティムの姪ジュリーは、自分のメダイユについて、「ノートル＝ダム・ド・ルルドのもので、フルーリッソワール叔母様がくださったの。ルルドから持ってきてくださったのよ²⁰」と説明している。また、フルーリッソワール家には、台の上にルルドの洞窟の聖母像が置かれておりと記されている。そして第二に、奇跡によって信仰を回復した後のアンティムが寄稿する雑誌が『ル・ペルラン』(*Le Pèlerin*) であることが挙げられる。「le pèlerin」というのは「巡礼者」を意味するが、この雑誌は1873年創刊の实在のカトリック系週刊誌で、初期には特にルルドなどの巡礼関係の記事を載せていたものであった。また、坐骨神経痛を患いカトリックと対立していた時のアンティムの帰属団体がフリーメイソンであることも示唆的である。これらの単語の選択からも、ジッドが意図的にこの時代のルルドや巡礼をめぐる状況を取り入れながらこの作品を描いていると考えることができよう。

しかしながら、『法王庁の抜け穴』全体を通して見出されるのは、この社会現象へ向けられたシニカルな視線である。例えば、無神論者だった頃のアンティムは、妻の妹マルグリットから目に入ったゴミを取り除いてくれと頼まれた際、マタイによる福音書7章3節の「あなたは兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」という一節をもじって、「それじゃあ、あなたは私の目の中にある根太を取り除く前に、あなたの目の中の藁を取り出せというのですね。福音書の教えとはまるっきり反対のようですね！²¹」と述べる。実際的な苦痛 (*le mal*) を前にした時、福音書の教えなど何の意味もなさないことを彼は当てこするのである。しかし、このようなアンティムにおいても、それまでの無神論を支えていた身体的な不調がなくなると、すぐさまカトリックの信仰へと寝返ったことは先に見た通りである。「彼においては、精神がどれほど肉体に相伴っていたかは注目に値する²²」という一文によって示されているように、こうしたアンティムの変わり身の素早さもまた、この作品においては揶揄されているのである。

さらに、『法王庁の抜け穴』においては、カトリック教会も風刺の対象である。「アンティムにとってはおそらく治っただけで十分だっただろうが、ローマ・カトリック教会はそれだけでは満足せず、明白な異端誓絶を求め、それを不思議な輝きで包み込もうとした²³」という箇所に見られるように、カトリックがアンティムの奇跡的な「病」の治癒とそこからの回心譚を利用

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

しようとする様子が描出されているからである。前述のとおり、ルルド巡礼は傷病者が奇跡的な治癒を遂げ、信仰心を回復するという一大スペクタクルをもって、カトリックが自らの存在意義やそのアイデンティティを誇示するのに一役買っていたとされるが、こうした当時の実際のカトリックの思惑が『法王庁の抜け穴』を通して暴かれているかのようである。

ところが、そうしたカトリックの狙いとは裏腹に、『法王庁の抜け穴』においてはアンティムの信仰心と反比例して、彼の周囲の元々カトリックだった人々が、教会への不満を募らせていく様子が描かれる。例えばジュリウスは、かつて無神論者だったアンティムが坐骨神経痛の治療のためにローマへ赴こうとしていた時、「お身体を治しにローマにいらっしゃるんですか！あちらにいらして、精神の方がどれほど重病でいらっしゃるかがお分かりになりますように！²⁴」と述べており、アンティムを身体的な「病」よりもむしろ、比喩的な意味での精神の「病」に侵された存在として捉えていた。にもかかわらず、坐骨神経痛の治療に伴ってアンティムが敬虔な信者となった時、すなわちジュリウスのいうところの精神的な「病」が癒えた時、彼はヴェロニックとともに、アンティムの信心深さに批判的になるのだった。そしてついには、かつて実験のために盲目にしてしまったネズミを今や甲斐甲斐しく世話するアンティムに対して、「あなたがそのネズミたちに対してなさっているくらいのことを、教会もあなたのためにするのが当然だと考えてもらいたいものです。同じようにあなたを盲目にしてしまったのですから²⁵」と述べる。ジュリウスは、貧しい暮らしを余儀なくされているにもかかわらずカトリックへの盲信を示すアンティムを、教会によって盲目にさせられていると皮肉るのである。

現実の巡礼運動をめぐる言説においては、恩寵によって身体的「病」の治療のみならず、家族やフランス社会を含む広義の共同体の、比喩的な意味での「精神の病」からの回復、つまり不信心からの信仰心の回復をももたらされるとされていた²⁶。しかしそうした言説とは反対に、『法王庁の抜け穴』では、一人の身体的な「病」の克服が人々の信仰心に波風を立ててしまうのである。

このようにアンティムの信仰心の回復は、彼の周囲にとっての救いをもたらさずにはしないといえるが、法王を救出するためローマへと向かったアメデについても、彼の信仰心が彼自身に引き起こす動揺が描かれていると見ることができる。アメデは、法王が幽閉されたと偽り詐欺を働くムカデ組の策略にはまり、ローマからナポリへ向かっている途中、旅をしていたラフカディオとたまたま同じ車室に乗り合わせたために、彼の「動機のない犯罪」(un crime immotivé)

の犠牲となって殺されてしまう（この一連のラフカディオの言動については、次節で詳述する）。この場面で興味深いのは、この殺人を犯す直前、ラフカディオがアメデについて、「あまり幸せそうではないな […]。痔瘻か、あるいは何か秘密の病気にでも悩まされているに違いない²⁷」という印象を抱いていることである。アメデは虫刺されや皮膚に生じた炎症以外に、重大な「病」に侵されていたわけではない。にもかかわらず、先に見たように、彼は自らの身体的な状況に大げさな不安を抱いており、また彼の信仰心につけ込む「ムカデ組」に、そうとは知らず振り回されていたために、彼の外見は次のようなものとなっていたのだった。

頬はこけ、喉仏が浮き出ている。深紅のスカーフがいつそう彼の青白さを目立たせていた。あごは震え、左右で色の違う目がくるくる回る様子は、哀れみをかき立てたに違いないが、滑稽でしかなかった²⁸。

ラフカディオでなくとも、このような状態にあるアメデを幸福と見た者はいないだろう。自らの身体状況を信仰との関係において捉え、また信仰心ゆえに詐欺集団に翻弄され、疑心暗鬼となっていたアメデにおいて、彼の心身の動揺を引き起こしていたのは彼の信仰心そのもののだといえるのである。

このように、『法王庁の抜け穴』においては、ルルド巡礼をめぐる社会の状況を踏まえた上で、奇跡や巡礼といった一大ブームに乗せられた人々の姿がアイロニカルな視点から描き出されている。しかし、この社会現象は、なぜ批判的に捉えられているのだろうか。そこには、こうした社会や人々の動きに対するジッドの立場が映し出されているように思われる。すなわち、巡礼は必ずしも純粋な信仰心に因るものではなく、多くの場合、信仰心を隠れ蓑にした打算的な行いであるというものである。『法王庁の抜け穴』では、物語の最後で、坐骨神経痛を再発したアンティムが、再びフリーメイソンの無神論者へと戻っていく様子が描かれる²⁹。肉体的なコンプレックスの解消と密接に結びついていた彼の信仰心は、身体的不調が戻ってくるとまた消えてしまうのである。

このアンティムのような、信仰のために奇跡を必要とする人々について、『法王庁の抜け穴』を出版した後ではあるが、ジッドは1916年に、キリスト教に関する考察を綴った『汝も亦…?』(Numquid et tu...?)の中で次のように記している。「なんだって！奇跡があったからあなた方は

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

彼 [=キリスト] を神聖と考えているのか！なんだって！あなたまで彼を信じるためには奇跡を必要とするのか？『主よ、あなたの徴を示したまえ』と言った『邪で不実な民のように』³⁰。ジッドにとって本当の信仰とは、奇跡などがなくとも揺らぐことのない、純粹な祈りでなければならないと捉えられていたことが理解される。こうした立場をとるジッドは、奇跡がなければ信仰できないような人々や、奇跡を利用して人々の信仰心を掻き立て、それを通じて自らの教会権力を強固なものにしようとするカトリックに対し、厳しい批判の目を向けるのである。

こうした観点から見ると、法王救出という名のもとにローマへ旅立つ「巡礼者」(le pèlerin) アメデの企てもまた、純粹な信仰心に突き動かされてのものとしては描かれていないことが指摘できる。なぜなら、「要するに、彼はこの旅を、ついに一人でそれを実行するのを楽しんでいた。47歳になるまで、どこへでも妻か友人のブラファファスかに付き添われて、後見人のもとでしか暮らしてこなかったのだ³¹」という一文が示すように、「巡礼」は彼にとって一人で出かける口実でもあり、彼はそれを楽しんでいるからである。実際、「le pèlerin」という単語には、「巡礼者」という意味に加えて、「旅行者」という意味が含まれている。したがって、ジッドはアメデを通じて、篤い信仰心に突き動かされている様子をしながらか、その実、旅行のような感覚で巡礼地へと出かける人々を揶揄していると捉えることができるだろう。

さらに『法王庁の抜け穴』においては、アンティムやアメデのみならず、ジュリウスやヴェロニックらの信仰心もまた、自身にとっての利害に基づくものとして描かれているといえる。ジュリウスは、カトリック教会と密接な結び付きを有する小説家であった。しかし、彼の存在や作品がカトリックから評価を得られていないと感じた途端、彼は教会に対して懐疑的となり、教会の支援を疑わない妻マルグリットに対して、次のような返答を返すのだった。

——アンドレ枢機卿は、あなたに [アカデミー入りのための] 一票を投じるとお約束な
り、カトリック教会はあなたの後ろ盾になると、この間もまたはっきりおっしゃっ
たじゃないの。

——そんなもの、あてになるものか！

——あなた…！

——我々はアンティムの例でお坊さんの高貴な庇護とやらがどれほどありがたいものか
を見たばかりじゃないか。

——ジュリウス、ひどいわ。あなたはよく言っていたじゃない、報酬や他人の称賛のために書くのではない、自分が気に入れば十分だって³²。

ジュリウスのそれまでの親カトリックの態度が変化したのは、確かにアンティムに対する教会の対応への不信もあっただろうが、それよりもむしろ「ジュリウスの近作は評判が悪かった³³」とあるように、自分の作品が思うような評価を得られなかったことによる部分が大きいと考えられる。人からの称賛のために執筆するのではないと口にしながらも、ジュリウスは自らの存在や彼の作品の後ろ盾であったからこそ教会と緊密な関係にあったといえるのである。そして教会への反感を強めた彼は、ついに次のような皮肉をカトリックに対して示すまでになるのだった。

最も利害を超えた魂というのは——カトリック的な意味で——必ずしも最良とは限りません。反対に、このカトリック的観点からすれば、最もよく形成された魂とは、最もよく損得を計算するものなのです³⁴。

こうしたジュリウスの言葉からは、カトリックの信仰には打算が働いているものであるとする辛辣な批判を見て取ることができる。しかしながら、こうした見方を通じて、彼はカトリックの信仰を持っていた時の自身の信仰のあり方を暴いてしまっているともいえる。そして利害関係からこの宗教に関わってきた彼は、教会の働きでアカデミー・フランセーズに選出された知らせを受け取った途端、カトリックに対して批判的だったことなどすっかり忘れ、再びカトリックへと戻っていくのである³⁵。

アンティムの妻ヴェロニックの信仰もまた、自らの精神的安定を保つためのものとして描かれている。物語の冒頭に、「彼女は単調な失意の生活を、こまごまとした信仰の実践によって埋め合わせており、不妊で子供のいない彼女には求められることのない心遣いを、理想に捧げていた³⁶」と記されているからである。しかしながら、夫のアンティムが敬虔な信者となった時、彼女はそのような夫に加え、教会に対しても次のように苛立つのだった。

彼のあきらめのよさには腹が立ってしょうがありません。自分自身の身を守ってもらいた

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

いけれど、どうにも仕様がなない。彼はガチョウのように羽をむしられるがままになりながら、どんどんむしってやろう、神の名においてむしってやろうとする人々みんなにお礼を言っているのですから³⁷。

この引用部分だけを取り上げるならば、彼女は夫アンティムが失った財産を補填する約束をしながらもそれを果たさない教会と、そうしたカトリックを盲信する夫に対して怒りをぶつけていると見ることができる。しかしながら、以下の言葉からは、ヴェロニックの関心が信仰にではなく、金銭に向いていることが明らかとなる。

「あなたはお説教文を書いていればいいのよ、ただもうちょっと原稿料を払うようにしてもらってちょうだい。」それからさらに苛立った語調で（以前、彼女はあんなににこやかだったのに！）「この人が昔『デペーシュ』誌に不敬な記事を書いて頂戴していた原稿料のことを考えたら、恥ずかしくなるようなお金なのよ！今『ル・ペルラン』誌にお説教文などを書いても雀の涙ほどの稿料なのに、この人ったら、その4分の3を貧しい人たちに施してしまうのです。」³⁸

本来、清貧な生活と貧者への施しは、キリスト者の模範的な態度であろう。にもかかわらず、彼女はそのような夫に我慢がならず、また自身もそのような生活を送ることに耐えられないのである。アンティムがフリーメイソンとしてロッジからの支援を得、一定の生活水準を保っていた頃の彼女にとって、信仰はあくまでも「単調な失意の生活」を埋め合わせるためのものだったのであり、金銭的な問題が浮上してきた今、信仰どころではなくなっていると理解することができる。

以上のような人々の信仰心の揺れ動きを通じ、ジッドは、奇跡や回心譚によって教会を盛り立てようとする宗教としてのカトリックと、自身の利害関係からこの宗教を信仰しているカトリック教徒を厳しく批判していると理解することができるだろう。その一方で、ラフカディオは、そうした枠組みにおいて分析することができない存在である。この人物はどのように捉えることができるであろうか。次節では、彼の言動を分析し、ジッドがラフカディオをこのような人物として描出した意図や、『法王庁の抜け穴』において作家が描き出そうとした「病」とは

いかなるものであったのか検討してみることにしたい。

IV. ラフカディオと「病」の問題

カトリックへの信仰をめぐって揺れ動くペトラ家とバラリウール家にまつわる人々の中で、ラフカディオの存在は特異である。私生児で、様々な国籍の人々の間で育ったコスモポリタンなこの青年は、社会の秩序や規範、慣習といったものに一切捕らわれない自由人である。作品の中で独特の存在感を放つこの青年を「病」という観点から見ると、どのような解釈の可能性があるだろうか。そしてそうしたラフカディオの特性は、この作品において扱われている、以上に見てきた宗教と「病」の問題と、どのように関わっているのだろうか。

それでは実際にラフカディオの言動の分析を通じ、これらの問題を探っていくことにしよう。はじめに着目したいのは、彼の自傷行為である。バラリウール伯爵の命によってラフカディオの自宅を訪問したジュリウスは、当時ラフカディオの情婦であったカローラによって部屋に案内され、家の中を勝手に物色しながらラフカディオの帰宅を待っていた。帰宅してその様を目撃したラフカディオは、この訪問者を家から追い出すと、ジュリウスが覗いたノートを引き出しから取り出し「この手帳に、愚かなほら吹き野郎の汚らわしい鼻を突っ込ませてしまったため＝一突き」、さらに「そしてそれを知っていると悟らせてしまったため＝二突き」と大きな字で書きつけ、ポケットからナイフを取り出して、ズボンのポケット越しに三度腿を突き刺したのだった³⁹。

彼がこうして自らの腿にナイフを突き刺すのはこの時が初めてではなく、過去にも例えば、人に自分がイタリア語を話せるところを見せてしまったからとか、母親の恋人だった人物が亡くなったことを知って泣いたから等、様々な理由によってなされているのだが、それらはいずれも、自らの行いに対して加えられているという点において共通している。つまり、ラフカディオは自分の行為に対して、自らの尺度で自ら罰を加えているのである。

自分自身の判断のみによってことを為そうとするラフカディオの行為の最たるものは、アメデの殺人である。バラリウール伯爵の遺産を手にし、旅に出たラフカディオは、途中ナポリ行きの列車で同じ車室に乗り合わせたアメデを殺してしまうが、その殺人を犯す直前、以下の様な考えが彼の頭に浮かんだのだった。

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

「動機のない犯罪」(un crime immotivé) とラフカディオは続けた。「警察にとって、なんと厄介なのだろう！ […] 僕に興味があるのは、事件そのものというより、自分自身についてなのだ。自分では何でもできると思っている奴が、いざ行動するとなるとしり込みしてしまう… 想像と現実とはなんと隔たっているのだろう！チェスの場合と同じように指し直しをするわけにはいかない。なあに！あらゆる危険が予知できたなら、賭けはまるっきりつまらないものになる。

[…]

もし僕が慌てずに 12 数えるうちに平野に火が見えなかったら、この猥みたいな野郎は助かる。始めるぞ、1、2、3、4、(ゆっくり！ゆっくり！) 5、6、7、8、9…10、火だ！」⁴⁰

そしてラフカディオは、アメデを列車の昇降口から突き落とす。ラフカディオが「動機のない犯罪」と呼ぶこの殺人は、被害者への個人的な恨みや、盗みを動機としておらず、その目的は殺人を犯せることを単に自らに示すこと、いかなる外的な要因からも自分が自由な存在であることを確認することの他にない。

何ものにも依拠せず、自分以外の何にもその動機を求めることのできないこうした行動について、ジッドはすでに、『法王庁の抜け穴』と同じく「ソチ」に分類される 1895 年の『パリュード』と 1899 年の『鎖の解けかけたプロメテウス』において、それぞれ「自由な行為」(l'acte libre) および「無償の行動」(une action gratuite) というタームによって検討している。しかし、ジッドがこのラフカディオの行為を生み出す過程で大いに意識したと考えられるのは、ドストエフスキーの『悪霊』(1872) におけるキリーロフの自殺の場面であろう。

ジッドが『法王庁の抜け穴』を構想し始めたのは 1902 年頃であったが、執筆に本腰を入れて取り組み始めたのは 1911 年以降であった。その間に、彼はドストエフスキーについての二つの論文「書簡からみたドストエフスキー」« Dostoïevski d'après sa Correspondance » (1908) および『カラマーゾフの兄弟』« Les Frères Karamazov » (1911) を発表している。また、この時期の日記などにおいてもドストエフスキーについての言及がしばしば見られ、1912 年 1 月末の日記には『悪霊』を再読し終え、すっかり感心したと記されている。こうした考察の集大成として、ジッドは後に、1922 年 2 月 18 日から 3 月 25 日にかけて 6 回に渡って行われたドストエフスキーについての講演の最終回で、この『悪霊』のキリーロフの自殺の場面を次のように分析

している。「キリーロフの自殺は、完全に無償の行為 (un acte absolument gratuit) である。つまり、彼の動機は全く外にはないということである⁴¹」。このキリーロフは、自殺をする理由を次のように説明する人物である。

もし神があるとすれば、すべての意志は神のもので、僕はその意志から脱け出せない。もしないとすれば、すべての意志は僕のもので、僕は我意を主張する義務がある。[...] 僕には自殺の義務がある、なぜなら僕の我意の頂点は、自分で自分を殺すことだから⁴²。

このようにキリーロフは、自分の独立性を示すために自らの命を絶つのである。ジッドにおいて、自分自身に端を発してなされる行為が « gratuit » (=無償の、動機のない) と形容されていることに鑑みるならば、ラフカディオの殺人もまた、キリーロフ的な「無償の行為」であるといえる。

しかしながら、ラフカディオの行う「無償の行為」は、アメデの殺人だけではない。彼は、火事の中から子どもを救い出すという行為もまた、「無償」で行うからである。ある日街を歩いていたラフカディオは、人だかりを目にする。真っ青な顔をした美しい娘 (のちにラフカディオは、これがジュリウスの娘ジュヌヴィエーヴであることを知る) に事情を尋ねると、傍ですすり泣いている貧しそうな女の二人の子供が、火が出ている建物の中に閉じ込められていると説明されたのだった。その途端、彼は塀の上によじ登り、みるみるうちに子供たちを救い出したのである。この一連のラフカディオの行為に関し、その理由や動機、さらにはその時の心情といったものは一切明らかにされていない。つまり、火事から子供たちを救うという行為に彼を駆り立てたのは、子供たちやその母親に対する哀れみや同情心、正義感、あるいはジュヌヴィエーヴが報酬として差し出すと約束した 60 フランのためといった明確な理由によるものとしては描かれていないのである。

ジッドは 1927 年 5 月 1 日の日記において、「無償の行為とは何か」(« Qu'est-ce que l'acte gratuit ? ») と問われたことに対し、次のように記している。

私は単に、利害を超越した行為 (l'acte désintéressé) というものは、必ずしも慈善心からなされるものでないということを言いたかったのだ [...]。私は [...] 存在の力強さや、その

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

内的な気象学は、あなた方が一般にそう振舞っているよりももう少し複雑であり、またあなた方が悪い力（les forces mauvaises）と呼ぶところのものは、すべてが自己中心的ではないということを知りたいのだ⁴³。

このように見るならば、「無償の行為」とは、殺人のような人にとって害となる行為だけでなく、また慈善心からなされるわけではないが自分本位でもないような、人のためになり得る行為も含まれることがわかる。この意味で、火事場でのラフカディオの行動もまた、「無償の行為」であると言えよう。

自分自身にのみ行動の動機を持つラフカディオは、一見神とは無関係に自らの行動を決しているようにも思われるが、その実、そこには神に対する強い意識があることが見て取れる。ラフカディオは、ナポリ行きの列車に乗り込んだ際、次のようなことを考えていたからである。

人はこうしたら、どうなるだろうかと想像する。しかし、いつも小さな隙間があって、そこから予想外の出来事が生じる。何だって思っていた通りに運ぶものじゃない。それこそが僕を行動に駆り立てるものだ。人のやることなんか、たかが知れている！「存在し得るすべてのものは、存在せよ！」こんなふうに僕は天地創造を解釈する⁴⁴。

アメデの殺人に通ずるラフカディオの思索は、天地創造に絡めて深められていたことが理解される。さらに、実際にアメデの殺害を行ったラフカディオは、そのことを知ったジュヌヴィエーヴから、「人間たちではなく、神様に自首なされればいいのよ。[...] ラフカディオ、教会があなたに刑罰を決めてくださり、悔悛の彼方に心の安らぎを見出せるようお助けくださるわ⁴⁵」との忠告を受ける。しかし、それに対して彼は敵意を込めて、「あなたはなんて立派なお説教をしてくださるのだ。あなたがそんな口を利くとは⁴⁶」と述べ、彼女を押しつけるのだった⁴⁷。宗教的な観点から罪を懺悔することを明確に否定するラフカディオからは、信仰への抵抗の意思が認められる。そしてこのような態度は、上に引用した『悪霊』のキリーロフのセリフにも看取されるように、それだけ一層神に囚われていることを示しているのである。

人助けもすれば殺人もし、信仰を否定しながらも神を強く意識しているというラフカディオの二重性、複雑性は、彼自身の「僕は一貫性のない人間なのです」（« je suis un être

d'inconséquence »⁴⁸) という言葉に現れている通りである。彼は、アンティムやアメデのように、ある刺激に対して単純な反応を示す人々（アンティムの研究テーマである「トロピスム」に還元される反応を見せる人々）とは異なった存在なのである。ジッドによれば、こうした「一貫性のなさ」(inconséquence) を見事に描いたのは、ドストエフスキーであった。ドストエフスキーは人間の「一貫性のなさ」に最も関心を抱いた作家であり、『罪と罰』(1866) のラスコーリニコフや、『悪霊』のキリーロフといった作中人物たちを通してそれを照らし出した作家だといっているのである⁴⁹。

しかしながら、ドストエフスキー作品における「一貫性のなさ」を示す人物たちと、ラフカディオには、一つの大きな違いを指摘することができる。それは彼らが「病」を持つか否かという点である。ドストエフスキーの作品において「一貫性のなさ」を示すのは、癲癇や、狂人と呼ばれるような精神的な「病」を患った人々である。それに対して、ラフカディオは自傷行為によってできた傷や、アメデの殺害の際に負ったひっかき傷を除いて、身体的にも肉体的にも具体的に何らかの疾患を持った存在としては描かれていない。より正確に言うならば、彼自身は心身の健康状態を気にしているようなそぶりを見せることはなく、また他の人物の視点を通じて、何らかの「病」を持った青年としては描出されていないのである。この重要な差異は、ジッドが 1899 年に発表したニーチェ論「アンジェールへの手紙 VI」(« Lettre à Angèle »VI) の中で、上に引用したキリーロフの殺人の場面での彼のセリフについて次のように記していることに鑑みるならば、ジッドが意図的に設定したものであると考えられる。

ドストエフスキーはこれらの言葉を狂人の口から言わせている。しかし、おそらく、ある事柄を最初に言わせるには、ある種の狂気が必要だったのだ。[...] 重要なことは、これらの事柄が言われたということである。なぜなら、いまやもう、それらを考えるのに狂気である必要はないからだ⁵⁰。

ジッドによれば、その時代に受け入れられないような事柄を、ドストエフスキーは狂人を通じ、つまり普通とは異なる思考やものの見方は「病」によるものであるとの口実を設けることによって描き出したという。実のところ、ラスコーリニコフやキリーロフという病人の姿を通してドストエフスキーが描いて見せたのは、当時の社会の病理＝悪 (le mal) であった。政治犯

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

として捕えられたことのあるドストエフスキーは、病人という仮面を用いながら、農奴解放令（1861）やインテリゲンチアの社会活動などによって大きな価値転換を見た1860年代ロシアの、階級格差や不平等、欺瞞や虚偽、無政府主義や無神論といった様々な問題が渦巻く社会の病理＝悪を鋭く描き出したのである。それに対して、ドストエフスキーの次の世代に生きるジッドは、ラフカディオという「病」を持たない人物を通して、当時の社会の病理＝悪を描き出そうと試みたのではないだろうか。とりわけ「第5部 ラフカディオ」のエピグラフに目を向けるとき、このようなジッドの思惑を看取することができるように思われる。このエピグラフは、ジョゼフ・コンラッド（1857-1924）の『ロード・ジム』（*Lord Jim*, 1899-1900）から、以下の一節を引いたものである。

治療法は一つしかありません！ただ一つのことだけが、我々を我々自身から治してくれるのです！ […] そう、厳密に言えば、問題はどうかではなく、どう生きるかなのです⁵¹。

この一節から読み取ることができるのは、我々は皆、治療すべき状態にあるが、それをどう治すかということに捕らわれていては、その状態は克服されないというメッセージである。これを『法王庁の抜け穴』の内容に当てはめるならば、「どう治すか」とはつまり、アンティムやアメデのような人間が見せた奇跡や贖罪や懺悔などによって病＝悪を克服しようとするものであり、そのような「治療法」によっては人々の置かれた状態、すなわち彼らに認められる病＝悪は払拭されないことが示されていると考えられる。そうであるならば、この作品においては、どう治すかということに捕らわれカトリックに翻弄される、「病」の状態にある人々に満ちた社会、そうした「病」の蔓延する社会が描き出されていると見ることができるのである。

それに対してラフカディオは、こうした安易な「悪」の除去を求めない人物であるといえる。彼は自分の犯したアメデの殺人という罪に対し、「たとえ警察の手を逃れたところで、僕は自分自身から逃れることができないだろう⁵²」と述べ、自分自身に認められる「悪」を自身の実存の問題として「どう生きるか」について思考するからである。ジッドは、一貫性を持たず、心身の「病」を持たないこの青年の姿を通じて、一様にカトリックに踊らされた社会の「病」を浮き彫りにすると同時に、「悪」を前にした人間の生き方の可能性を読者に問いかけようとしたのではないだろうか。

おわりに

以上のように、『法王庁の抜け穴』においては、悪の軽減を期待してカトリックに振り回される人々の状態こそが、克服され得ない「病」として描き出されていた。そして、そこには巡礼や奇跡といった当時のフランス社会に見られた一大ブームの中に、打算的な信仰を見たジッドの批判が看取された。ジッドは、1916年の『汝も亦…?』において、「主よ、私どもは自分の十字架を負って初めてあなたの後に従うことができます。[...] 十字架の荷が、そして人間があなたとともに負うものすべてが、魂を立ち直らせるのです⁵³」と記している。悪=罪は、決してカトリック的な悔悛や告解によって帳消しにされるものではなく、それを自らに負うことこそが、神へと至る道なのである。その意味において、神に抵抗すべく殺人という悪=罪を犯しながらも神を強烈に意識し、自分の犯した悪を自分自身の問題として生きようとするラフカディオこそが、神への道に近い存在であるという逆説を認めることができる。

ラフカディオの行う「無償の行為」は、何ものにも左右されず、自分自身に端を発してなされる行為であったが、そのことに鑑みるならば、ジッドはこの作品を通じて、信仰こそがこのようなものでなければならないことを示そうとしたと考えられる。ドストエフスキーについての6回講演や日記などにおいて、ジッドはしばしば「私について来たいものは自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい。自分の命を救いたいと思うものはそれを失うが、私のために命を失うものは、それを得る」(マタイによる福音書 16章 24-25節)という言葉を引用している。フリーメイソンの広がりや科学の発展、ルルド巡礼を通じたカトリック教会の復興に見られる、様々な思惑の絡み合った19世紀末から20世紀初頭にかけての社会において、善か悪か、利か害かという判断によるのではなく、「無償」で神と向き合い、自らの生き方を思考することの重要性をジッドは示そうとしていたのではないだろうか。

¹ 本研究では、結核や発狂など具体的な心身の疾患に加えて、ジッドにおいて観念的に病的なものと捉えられている事象を「病」と表すこととする。

² 従来のジッドと「病」を巡る研究には、以下のようなものが挙げられる。ジッド自身の「病」の経験と、作家の「病」についての思索や作品を関連付けて考察している研究には、Pierre Petit, « Tuberculose et sensibilité

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

chez Gide et Camus », *BAAG*, vol. 9, n° 51, juillet 1981, pp. 279-292 がある。また、作品に描かれる「病」の果たす役割やその表象を分析する研究の一例としては、Sidonie Rivalin-Padiou, « Le motif du sang dans *L'Immoraliste* », *BAAG*, vol. 25, n° 113, janvier 1997, pp. 7-16 や、Michael Johnson, « Écrire la maladie. Une lecture de *L'Immoraliste* », *BAAG*, vol. 29, n° 131/132, juillet-octobre 2001, pp. 379-390 がある。

³ ジッドは自らのフィクション作品を、「レシ」(récit)、「ソチ」、「ロマン」(roman) の三つのジャンルに分類した。「レシ」とは、個人の心理や身の上を、第一人称で語った作品のことであり、『狭き門』や『田園交響楽』(*La Symphonie pastorale*, 1919) など多くの作品がこれにあたる。それに対して「ロマン」は、視点が次々と変化し、それによって読者に単純な理解を許さないような作品であるが、これに分類されるのは『贋金使い』(*Les Faux-monnayeurs*, 1926) のみである。一方、「ソチ」は、風刺や皮肉に富む作品のことであり、『法王庁の抜け穴』の他に、『パリュード』(*Paludes*, 1895) および『鎖が解けたプロメテウス』(*Le Prométhée mal enchaîné*, 1899) がある。

⁴ Alain Goulet, “*Les Caves du Vatican*” d’André Gide : étude méthodologique, Larousse, 1972.

⁵ Russell Brian West, *Figures de la maladie chez André Gide*, thèse de doctorat soutenue devant l’Université Lille III – Charles de Gaulle, le 23 mars 1996.

⁶ 『法王庁の抜け穴』とドストエフスキーの作品の関連性について検討している先行研究の一例として、以下のものが挙げられる。Alain Goulet, *op. cit.* Daniel Moutote, « Dostoïevski et Gide », *RHLF*, n° 5, septembre-octobre 1976, pp. 768-793. 山本和道『ジッドとサン＝テグジュペリの文学——聖書との関わりを探りつつ』(第2章「ジッドとドストエフスキー」)、学術出版会、2010年。

⁷ 本家系図は、前述のグーレによる研究の中に記された家系図を参考にし、一部に手を加えたものである(Alain Goulet, *op. cit.*, p. 134)。

⁸ レオ13世(1810-1903)は、1878年から1903年に在位した実在の教皇である。実証主義的近代科学の急激な伸長、1870年の教皇領消失という転換期にあつて、西欧におけるカトリック復興に貢献した。社会問題に取り組んだ教皇として知られ、91年の回勅« *Rerum novarum* »(「レーラム・ノヴァールム」)において反社会主義の立場を守りつつ、トマス説に立って国家や社会正義、労働を論じた。

⁹ André Gide, *Les Caves du Vatican*, in *Romans et récits I*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2009, p. 1000. 強調はジッドによる。以下、同作品を *CV* と略記する。

¹⁰ *CV*, p. 1016.

¹¹ この一連のアンティムの身に起きた出来事は次のように説明されている。「おそらく、アルマン＝デュボワは注目に値する恩恵に浴したのであろう。聖母が彼の前に実際に表れたと断言するのは慎重を欠くかもしれない。しかし、仮に夢に見ただけであったとしても、少なくとも快癒したということは、否定できない、実証できる、間違いなく奇跡的な事実としてそこにある。」(*CV*, p. 1017.)

¹² *CV*, p. 1080.

¹³ *CV*, p. 1070.

¹⁴ *CV*, p. 1088.

¹⁵ *CV*, p. 1093.

¹⁶ *CV*, p. 1115. 強調はジッドによる。

¹⁷ 寺戸淳子『ルルド傷病者巡礼の世界』、知泉書館、2006年、183頁。

¹⁸ このゾラの著作によれば、「ルルドの奇跡」とは、詐欺師や聖職者たちに、世間知らずで信じやすい一般大衆が翻弄されている現象に過ぎず、またベルナデットも無知で愚鈍なヒステリー患者に他ならないとさ

れている。この作品は、教会関係者やカトリックに改宗したユイスマンスらから、実際の奇跡的治癒の事例を歪曲しているとして非難された。

¹⁹ ユイスマンスは、この著作の中で、ルルドが一種の行楽地のような商業主義的様相を呈していることや、傷病者を伴わない巡礼団を旅行者呼ばわりする司祭が存在することなど、そこに見られる否定的な側面を描出している。

²⁰ *CV*, p. 1007.

²¹ *CV*, p. 1005.

²² *CV*, p. 1016.

²³ *CV*, p. 1017.

²⁴ *CV*, p. 995.

²⁵ *CV*, p. 1081.

²⁶ 寺戸淳子、前掲書、167頁。

²⁷ *CV*, p. 1133.

²⁸ *CV*, pp. 1118-1119.

²⁹ *CV*, p. 1167.

³⁰ André Gide, *Numquid et tu... ?*, in *Journal I 1887-1925*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1996, p. 1004.

³¹ *CV*, pp. 1083-1084.

³² *CV*, p. 1023.

³³ *CV*, p. 1021.

³⁴ *CV*, p. 1123.

³⁵ *CV*, p. 1164.

³⁶ *CV*, p. 996.

³⁷ *CV*, p. 1081.

³⁸ *CV*, p. 1081.

³⁹ *CV*, p. 1032.

⁴⁰ *CV*, p. 1134.

⁴¹ André Gide, « Dostoïevski » VI, in *Essais critiques*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1999, p. 645.

⁴² ドストエフスキー『悪霊（下）』、江川卓訳、新潮文庫、1971年、529頁。

⁴³ André Gide, *Journal II 1926-1950*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1997, p. 30.

⁴⁴ *CV*, p. 1129.

⁴⁵ *CV*, p. 1174.

⁴⁶ *Ibid.*

⁴⁷ ラフカディオには、多くの部分において『罪と罰』（1866）のラスコーリニコフとの類似が認められる。例えば、彼らは共に自らを一般の人々とは異なる存在として捉えている点、特徴的な帽子を持っている点、突発的に行った殺人の後、激しい不安に駆り立てられるという点、また本文中で先に見た、火事に飲み込まれそうになっている子供を無償で助けるという点などである。しかしながら、物語の最後で、ラフカディオは彼を救おうとするジュヌヴィエーヴを退けるが、ラスコーリニコフは娼婦ソーニャの導きによって自首し、その服役中に信仰を得、更生への道を歩むという大きな違いがある。

⁴⁸ *CV*, p. 1055.

アンドレ・ジッドの『法王庁の抜け穴』における
「病」の問題

⁴⁹ André Gide, « Dostoïevski » III, in *Essais et critiques*, *op. cit.*, p. 601.

⁵⁰ André Gide, « Lettres à Angèle » VI, in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 42. 強調はジッドによる。

⁵¹ « There is only one remedy! One thing alone can cure us from being ourselves! / – Yes ; strictly speaking, the question is not how to get cured, but how to live. » (*CV*, p. 1127.)

⁵² *CV*, p. 1174.

⁵³ André Gide, *Numquid et tu... ?*, *op. cit.*, p. 1007. 強調はジッドによる。

La question de la « maladie » dans *Les Caves du Vatican* d'André Gide

Akie NISHIMURA

André Gide est un écrivain qui aborde la question de la « maladie » par divers aspects. Cette question gidienne est également traitée dans sa sottie *Les Caves du Vatican*. Alors, quelle est la « maladie » dans cette œuvre ? À travers cette « maladie », comment pouvons-nous saisir l'intention de l'auteur ?

Pour examiner ces questions, nous remarquerons tout d'abord deux personnages souffrants : Anthime, qui endure la sciatique depuis longtemps, et Amédée, qui s'inquiète de la maladie de peau. Leurs états physiques sont étroitement liés à leurs attitudes à l'égard de la religion. Car, Anthime, qui était franc-maçon et athée, devient pieux après la guérison miraculeuse de sa maladie ; Amédée considère sa peau irritée comme un « châtiment » pour le péché qu'il a commis l'autre jour.

Afin de comprendre la raison pour laquelle ils sont écrits en tant que tels, nous nous reporterons au contexte du pèlerinage de Lourdes où fréquentent maints malades à partir de la deuxième partie du XIX^e siècle. En profitant l'enthousiasme du sentiment religieux qu'a produit ce pèlerinage, l'Église catholique a réussi à rétablir son influence sociale. En effet, elle la diminuait depuis que ses deux adversaires, la République et la franc-maçonnerie, ont affirmé leurs présences en France. Quant aux catholiques, beaucoup d'entre eux ont compté sur les avantages de ce pèlerinage. *Les Caves du Vatican* ironise ainsi, à travers les figures d'Anthime et d'Amédée, sur les catholiques qui agissent dans leurs intérêts.

À la différence d'eux, Lafcadio fait des « actes gratuits » pour se prouver qu'il est capable d'agir librement. Il ressemble à Kirilov ou à Raskolnikov, personnages dostoïevskiens, qui font également des « actes gratuits » gidiens, mais bien que ceux-ci soient malades, Lafcadio ne l'est pas. À notre avis, par rapport à Dostoïevski qui décèle le « mal » social à travers les personnages malades, Gide met en contraste avec Lafcadio sans maladie, des hommes « maladifs » qui laissent entraîner par l'Église pour réduire leur « mal ». Ainsi, notre écrivain suggère que la vraie croyance doit être « gratuite ».